



6 唐人調馬図 森徹山 一幅

紙本着色

江戸時代後期(十八〜十九世紀)

本紙九三・七×一七七・二

森徹山(二七七五〜一八四二)は、森狙仙の兄、周峯の子で、狙仙の養子となり、狙仙の勧めで晩年の応挙に学び、応挙の高弟の一人として知られる。やはり動物画を得意とし、狸などを飼ってその写生に励んだという。応挙の影響が多めで、彼の作品には応挙の画風が良く表れている。大坂に在していたことから、円山派の画風を大坂に広めることにもなった。

本図は、官人らしい人たちが馬と共に集い、交流している様子を描いている。馬は皆、美しく手入れをされ、立派な鞍が着けられる。官人たちは、馬の世話人と共にここに来て、互いの馬の自慢話などに花を咲かせている様子である。馬の姿態などは、馬図を得意とした中国元時代の任仁発の作品に良く似ており、中国の古典を題材にしていることが判る。ただ、現時点では、この図が具体的にどのような主題で描かれたものかは判然としない。とは言え、その描写は、抑揚ある直線、曲線が伸びやかに用いられ、繊細な表現まで神経が行き渡って、表情も実に豊かである。彩色も抑え気味ながら美しい調和を保ち、樹木などの描き方を含めて、円山派らしい画風を示す。しかし、特に描線の用い方は、徹山らしいためらいなくすっきりと引きながらも伸びやかさのある描線であり、彼の持つ画才の優秀さを感じることができる。徹山の作品として、当館では対幅の「孔雀図」も所蔵しているが、その図もまた、応挙が得意とした孔雀図の影響は濃いものの、応挙の孔雀とは異なった凛とした美しさのある画面を描き上げている。

本図は、明治三十九年(一九〇六)に霞ヶ関離宮の装飾用として購入されたものであることが知られるが、素絢の「朝顔狗子図」も含め、明治期の購入作品にこうした近世円山派の作品が好まれていることは、この時期の皇室建築内の装飾画として、京都画壇の日本画が未だ優勢であったことを示している。



- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

描き継ぐ日本美 — 円山派の伝統と発展

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 59

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十四年九月十五日発行

© 2012, The Museum of the Imperial Collections